

# 5才児の保健状態について

(う歯、視力、ツベルクリン反応の実態)

市 川 民 慈 子

## I は じ め に

述者は新制女子大学発足以来、保健体育講義の担当者として多年彼女達の体格、体力、気質、保健状態等々の全般にわたって継続的に調査、測定、観察を行ない、それらの報告を重ねてきたことは既発表の如くである。同時に生徒、幼児、乳児の保健発育にも関心をもち、園医として、また嘱託医として助言を行なってきた。前回は幼稚園の1年保育児について、その体力の一考察として、未だあまり発表に接しない握力の測定報告を行なった<sup>(1)</sup>。そのさい彼等の身体発育と保健状態をも調査して、特に驚異に感じたのは乳歯の齲蝕状態についてであった。人間の健康、とくに栄養問題と直接関係のある歯牙の発育は、立派な永久歯をうるために衛生指導の必要性はいうまでもなく、学校衛生の重要課題と考えるので、5才児の実態を報告して育児者の関心と反省を喚起したい。

つぎにわが国の学生、生徒の視力、即ち近視は年々増加しているが、その多くは学令前後に始まるので、幼稚園児の実態を把握して、予防を行なうことはまた重要といえる。さらに結核については、わが国では年々死亡率は減少しているとはいえ、決して罹患率が減少しているのではない。都市では15歳迄に半数以上が感染し、30歳迄には殆んどすべての人はツベルクリン反応(ツ反応)陽性となるといわれている。結核の発病を警戒すべきことは予防法の示す如くであり、したがって幼児のツ反応の実態をすることはまた有意義といえる。

以上の関点から、今回は就学前の幼児にとって問題のある歯牙とくに齲歯(う歯)と視力について、さらにツ反応の項を追加して、神戸市立楠幼稚園の1年保育児の実態を報告する次第である。

## II 調 査 の 実 態

5才児 406名即ち男児 203名、女児 203名についてのう歯、視力、ツ反応の実態は次の如くである。

男児 \* 双生児 ツ反応 (一) は記載省略

1  
組

№	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	青 ○ 哲 ○	1.5	1.5	0	11	11	副鼻腔炎
2	井 ○ 達 ○	1.5	1.5	1	12	13	結膜炎
3	大 ○ 洋 ○	1.5	1.5	2	10	12	慢性扁桃炎
4	九 ○ 幸 ○	1.5	1.5	1	10	11	慢性鼻炎、寄生虫卵 (卅)
5	小 ○ 一 ○	1.2	1.2	0	4	4	慢性鼻炎
6	佐 ○ 正 ○	1.5	1.5	2	11	13	慢性鼻炎
7	杉 ○ 元 ○	1.2	1.5	3	0	3	結膜炎
8	孫 ○ 長 ○	1.5	1.2	3	9	12	慢性扁桃炎
9 *	高 ○ 清 ○	1.5	1.5	1	5	6	慢性扁桃炎
10 *	高 ○ 勝 ○	1.5	1.2	1	6	7	副鼻腔炎
11	屋 ○ 和 ○	1.5	1.5	4	3	7	
12	平 ○ 隆 ○	2.0	1.5	0	0	0	
13	目 ○ 一 ○	1.5	1.5	6	2	8	
14	山 ○ 敬 ○	1.5	1.5	3	12	15	
15	横 ○ 幸 ○	1.5	1.5	0	10	10	扁桃肥大
合 計				27	105	132	

2  
組

№	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1 *	秋 ○ 修 ○	1.5	1.5	4	6	10	
2 *	秋 ○ 征 ○	1.5	1.5	4	7	11	
3	芦 ○ 哲 ○	1.5	1.5	0	3	3	ツ反応 (±)
4	井 ○ 和 ○	1.5	1.5	2	13	15	
5	奥 ○ 豊 ○	1.5	1.5	0	0	0	ツ反応 (+)
6	片 ○ 俊 ○	1.2	0.8	1	15	16	
7	小 ○ 秀 ○	1.2	1.2	2	3	5	ツ反応 (±)
8	科 ○ 利 ○	1.5	1.5	8	6	14	
9	席 ○ 茂 ○	1.0	1.5	8	2	10	
10	谷 ○ 孔 ○	1.5	1.5	0	12	12	慢性鼻炎
11	絶 ○ 克 ○	1.5	1.5	0	10	10	

12	早 ○ 敏 ○	1.5	1.5	0	11	11	結膜炎 慢性扁桃炎
13	藤 ○ 勝 ○	1.5	1.5	1	9	10	
14	森 ○ 忠 ○	1.0	1.2	0	20	20	
15	山 ○ 芳 ○	0.8	1.2	1	14	15	
合 計				31	131	162	

3  
組

No	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	足 ○ 隆 ○	2.0	2.0	1	2	3	難産
2	伊 ○ 直 ○	1.5	1.5	1	4	5	ツ反応 (±)
3	大 ○ 修 ○	1.5	1.5	1	1	2	
4	魚 ○ 茂 ○	1.5	1.5	0	8	8	慢性鼻炎
5	香 ○ 精 ○	1.5	1.5	0	7	7	ツ反応 (±)
6	佐 ○ 仁	1.2	1.2	5	9	14	慢性鼻炎
7	篠 ○ 和 ○	2.0	2.0	3	2	5	ツ反応 (+)
8	清 ○ 徹	1.5	1.5	5	7	12	
9	太○掛 信 ○	1.5	1.5	2	10	12	
10	立 ○ 武 ○	1.5	1.5	0	10	10	
11	田 ○ 敬 ○	0.8	0.8	0	6	6	内斜視 ツ反応 (+)
12	地 ○ 一 ○	1.5	1.5	2	8	10	ツ反応 (+)
13	寺 ○ 行 ○	1.2	1.2	2	4	6	
14	永 ○ 精 ○	1.5	1.5	2	13	15	
15	橋 ○ 隆 ○	1.5	1.5	3	9	12	
16	藤 ○ 得 ○	1.5	1.5	8	0	8	
17	○ 安 晶 ○	1.2	1.2	1	17	18	難産 (鉗子分娩)
18	正 ○ 大 ○	1.5	1.5	1	17	18	
19	松 ○ 陽 ○	1.5	1.5	0	10	10	
合 計				37	144	181	

## 4組

No.	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	石 ○ 貞 ○	1.5	1.2	0	9	9	ツ反応 (++)
2	井 ○ 保 ○	1.5	1.5	6	5	11	
3	岩 ○ 雅 ○	1.5	1.5	5	7	12	
4	岡 ○ 福 ○	1.5	1.5	0	8	8	
5	金 ○ 吉 ○	1.5	1.5	3	4	7	
6	熊 ○ 俊 ○	1.5	1.5	3	5	8	
7	島 ○ 洋 ○	1.5	1.5	0	1	1	
8	立 ○ 賢 ○	1.5	1.5	3	11	14	
9	田 ○ 耕 ○	1.5	1.5	1	8	9	
10	堤 ○ 一郎	1.5	1.5	5	2	7	
11	長 ○ 秀 ○	1.5	1.2	4	2	6	ツ反応 (+)
12	○ 田 実	1.5	1.5	2	7	9	ツ反応 (+)
13	樋 ○ 雅 ○	1.2	1.5	8	0	8	結膜炎
14	堀 ○ 岳 ○	1.2	1.5	0	9	9	結膜炎
15	元 ○ 吉 ○	1.5	1.5	2	13	15	慢性鼻炎
16	村 ○ 勇	1.5	1.5	3	11	14	
合 計				45	102	147	

## 5組

No.	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	荒 ○ 保 ○	1.5	1.5	5	4	9	難産
2	池 ○ 栄 ○	1.5	1.5	3	7	10	
3	石 ○ 耕 ○	0.07	1.2	0	7	7	
4	稲 ○ 光 ○	1.5	1.5	0	18	18	未熟児 (8ヵ月)、結膜炎
5	久 ○ 吉 ○	0.6	0.8	1	8	9	
6	酒 ○ 新 ○	1.5	1.2	0	0	0	
7	角 ○ 司	1.5	1.5	6	2	8	
8	高 ○ 一 ○	1.5	1.5	1	12	13	
9	出 ○ 晴 ○	1.5	1.5				結膜炎
10	竹 ○ 神 ○	1.5	1.5	0	10	10	結膜炎
11	田 ○ 尚 ○	1.5	1.5	2	2	4	結膜炎、ツ反応 (±)

12	土	○	豊	1.5	1.5	6	2	8	慢性鼻炎 色弱
13	藤	○	毅	1.2	1.2	0	18	18	
14	札	○	章	1.5	1.5	0	10	10	
15	細	○	典	1.5	1.2	0	3	3	
16	山	○	雅	1.5	1.5	0	9	9	
17	間	○	幸	1.5	1.0	0	15	15	難産（鉗子分娩）
合 計						24	127	151	
未 検 診								1	

6  
組

No.	氏 名			視 力		う 歯			備 考
				右	左	処 置	未処置	計	
1	荒	○	和	1.0	1.5	3	1	4	ツ反応（++） 難産 寄生虫卵（++）
2	金	○	治	1.2	1.2	1	9	10	
3	川	○	隆	1.2	1.5	1	3	4	
4	○	谷	○	1.2	1.2	8	7	15	
5	坂	○	哲	1.5	1.5	0	14	14	
6	佐	○	克	1.5	1.5	4	1	5	
7	沢	○	淳	1.5	1.5	1	9	10	
8	田	○	徹	1.5	1.5	0	10	10	
9	土	○	豊	1.5	1.5	6	1	7	
10	西	○	雅	1.5	1.5	0	16	16	
11	○	本	達	1.5	1.5	1	3	4	
12	平	○	克	1.5	1.5	2	10	12	
13	藤	○	忠	1.0	1.2	4	6	10	
14	政	○	明	1.5	1.5	0	6	6	ツ反応（±）
15	万	○	喜	1.5	1.5	1	3	4	寄生虫卵（++）
16	三	○	圭	1.2	1.5	2	18	20	
17	森	○	伸	1.5	1.5	0	8	8	
18	西	○	恵	1.5	1.5	4	1	5	
19	柚	○	馨	1.2	1.2	3	15	18	
合 計						41	141	182	

7  
組

No.	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	池 ○ 伸 ○	1.5	1.2	7	2	9	難産 ツ反応 (+) 結膜炎
2	井 ○ 靖 ○	1.5	1.5	3	1	4	
3	大 ○ 雅 ○	1.5	1.5	6	4	10	
4	角 ○ 洋 ○	1.5	1.5	5	3	8	
5	衣 ○ 英 ○	1.5	1.5	0	5	5	
6	貞 ○ 利 ○	1.5	1.5	1	9	10	
7	茶 ○ 正	1.2	1.5	3	6	9	
8	徳 ○ 美○男	1.5	1.2	0	19	19	
9	中 ○ 隆 ○	1.2	0.2	0	14	14	
10	斐 ○ 宝	1.2	1.2	4	6	10	
11	藤 ○ 朋 ○	1.5	1.5	0	12	12	
12	細 ○ 通 ○	1.5	1.5	0	14	14	
13	松 ○ 大 ○	1.5	1.5	2	4	6	
14	村 ○ ○ 昭	1.5	1.5	1	6	7	
15	森 ○ 博 ○	0.6	1.2	0	14	14	
16	和 ○ ○ 明	1.5	1.5	6	1	7	
合 計				38	120	158	

8  
組

No.	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	青 ○ 裕 ○	1.5	1.5	0	12	12	結膜炎
2	井 ○ 敏 ○	1.2	1.2	2	5	7	ツ反応 (+)
3	岩 ○ ○ 三	1.5	1.5	4	0	4	
4	大 ○ 政 ○	1.5	1.5	0	9	9	右耳難聴
5	岡 ○ 清 ○	1.5	1.5	0	11	11	寄生虫卵 (+)
6	加 ○ ○ 啓	1.5	1.5	0	3	3	ツ反応 (++)
7	北 ○ 寛	1.5	1.2	0	12	12	
8	小 ○ ○ 一	1.2	1.2	0	6	6	
9	酒 ○ 仁 ○	1.5	1.5	4	0	4	結膜炎
10	坂 ○ ○ 土	1.5	1.5	0	16	16	
11	○ 谷 芳 ○	1.0	1.2	0	19	19	ツ反応 (+)

12	菅	○	二	2.0	1.5	7	2	9	ツ反応 (+)
13	谷	○	隆	1.2	1.2	4	12	16	
14	玉	○	清	1.2	1.2	0	0	0	
15	福	○	浩	1.5	1.5	0	11	11	結膜炎
16	○	本	清	1.5	1.5	3	4	7	
17	藤	○	彦	1.5	1.5	0	3	3	
18	末	○	司	1.5	1.5	4	9	13	右耳難聴
合 計						28	134	162	

9  
組

No.	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	横 ○ ○ 一	1.5	1.5	3	3	6	
2	三 ○ 淳 ○	1.5	1.5	0	0	0	ツ反応 (+)
3	宮 ○ ○ 仁	1.0	1.0	6	6	12	ツ反応 (±)
4	福 ○ 正	0.4	0.4	0	19	19	難産(帝王切開)ツ反応(±)
5	筒 ○ ○ 文	1.5	1.5	0	13	13	
6	津 ○ ○ 二	1.5	1.5	0	4	4	難産 (帝王切開)
7	西 ○ 孝 ○	1.5	1.5	0	3	3	ツ反応 (±)
8	長 ○ ○ 彦	1.5	1.5	2	7	9	ツ反応 (+)
9	○ 尾 和 ○	1.5	1.5	2	8	10	
10	豊 ○ ○ 文	1.5	1.5	5	6	11	
11	鶴 ○ 義 ○	1.5	0.07	4	9	13	扁桃炎傾向
12	武 ○ 省 ○	1.5	1.5	0	6	6	
13	田 ○ 和 ○	1.5	1.5	2	1	3	ツ反応 (±)
14	嶋 宏 ○	1.5	1.5	5	10	15	
15	塩 ○ 政 ○	1.0	1.2	0	11	11	ツ反応 (+)
16	坂 ○ 誠	1.2	1.5	2	1	3	難産
17	片 ○ 昭 ○	1.2	1.5	0	14	14	
18	尾 ○ 邦 ○	0.6	0.6	1	7	8	
19	浦 ○ 敏 ○	1.5	1.5	0	9	9	
20	池 ○ 秀 ○	1.5	1.5				結膜炎
合 計				32	137	169	
未 検 診		1					

10  
組

No.	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	朝 ○ 央 ○	1.2	1.5	0	12	12	難産(鉗子分娩)扁桃肥大
2	安 ○ ○ 之	1.0	1.0	1	0	1	
3	泉 ○ 朗	1.5	1.5	2	4	6	扁桃肥大 ツ反応(±)
4	○ 藤 ○ 男	1.5	1.5	0	0	0	
5	田 ○ 朗	1.5	1.5	0	10	10	慢性鼻炎 ツ反応(++)
6	高 ○ 健○郎	1.5	1.5	0	0	0	結膜炎
7	谷 ○ ○ 明	1.0	1.2	0	9	9	
8	田 ○ 章 ○	1.2	1.0	4	0	4	結膜炎
9	中 ○ 中	1.5	1.5	0	13	13	結膜炎、慢性鼻炎
10	○ 西 義 ○	1.5	1.5	2	1	3	扁桃肥大
11	永 ○ 均	1.5	1.5	0	16	16	
12	西 ○ 利 ○	1.5	1.5	2	0	2	ツ反応(+)
13	○ 村 博 ○	1.5	1.5	0	0	0	
14	橋 ○ ○ 生	1.5	1.5	2	0	2	
15	○ 川 順 ○	1.5	1.5	2	4	6	
16	湊 政 ○	1.5	1.5	0	10	10	難産 ツ反応(+)
17	森 ○ 弘	2.0	2.0	6	6	12	結膜炎
18	八 ○ 義 ○	1.5	1.5	0	0	0	慢性鼻炎
19	山 ○ 勝 ○	1.5	1.2	3	3	6	慢性鼻炎 ツ反応(+)
合 計				24	88	112	

11  
組

No.	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	今 ○ 浩			1	12	13	副鼻腔炎
2	○ 英○郎			0	18	18	慢性鼻炎
3	片 ○ 友 ○			0	0	0	耳垢
4	島 ○ 大 ○			0	8	8	扁桃肥大 ツ反応(+)
5	下 ○ 幸 ○			0	11	11	
6	住 ○ 亘			0	8	8	慢性鼻炎
7	千 ○ 浩			0	6	6	慢性鼻炎
8	常 ○ ○ 一			0	6	6	



9*	中 ○ 雅 ○			0	3	3	
10*	中 ○ 敬 ○			0	6	6	結膜炎、慢性鼻炎
11	服 ○ 誠			2	4	6	慢性鼻炎
12	針○失 ○ 光			0	4	4	ツ反応 (+)
13	枇○木 ○ 和			0	6	6	
14	福 ○ ○ 之			0	11	11	
15	三 ○ 智 ○			1	7	8	
合 計				4	110	114	
未 検 診		15	15				

12  
組

No	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	上 ○ 尚 ○	1.5	1.5	8	0	8	慢性鼻炎
2	岡 ○ ○ 彦	1.5	1.5	3	7	10	結膜炎 ツ反応 (+)
3	耿 朝 ○	1.5	1.5	4	2	6	
4	木 ○ 豊	1.5	1.5	2	3	5	中耳炎、アデノイド、 左右耳や、難聴
5	須 ○ 弘 ○	1.5	1.5	0	14	14	
6	高 ○ 一 ○	1.5	1.5	1	15	16	慢性鼻炎
7	中 ○ 浩 ○	1.5	1.5	0	0	0	
8	○ 本 政 ○	1.5	1.5	0	10	10	アデノイド
9	西 ○ 明	1.5	1.2	0	0	0	
10	平 ○ 英 ○	1.5	1.5	5	6	11	扁桃肥大
11	丸 ○ 修 ○	1.2	1.5	0	3	3	扁桃肥大
12	山 ○ ○ 明	1.5	1.5	2	9	11	慢性鼻炎
13	幸 ○ 則 ○	1.5	1.5	0	8	8	慢性鼻炎
14	R. E. John.	1.5	1.5	0	1	1	
合 計				25	78	103	

女 児 \* 双生児 ツ反応 (一) は記載省略

1  
組

№	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	青 ○ 文 ○	2.0	1.5	0	16	16	
2	今 ○ 真○美	2.0	2.0	5	8	13	
3	柏 ○ 千○子	1.0	0.8	1	2	3	慢性鼻炎
4	川 ○ マ ヤ	1.5	1.2	1	3	4	結膜炎
5	城 ○ 美○子	1.5	1.2	1	4	5	
6	小 ○ 由 ○	1.0	1.0	0	6	6	結膜炎
7	古 ○ 早○子	1.5	1.2	0	3	3	慢性鼻炎
8	鈴 ○ ○ 美	0.6	1.2	2	0	2	慢性鼻炎
9	清 ○ 愛 ○	1.5	1.2	1	13	14	
10	妹 ○ 晴 ○	2.0	2.0	4	6	10	
11	中 ○ 公 ○	1.5	1.5				慢性鼻炎
12	○ 村 満 ○	1.5	1.5	1	11	12	
13	濁 ○ かおる	1.5	1.5	4	0	4	
14	橋 ○ ○ 帆	0.6	1.2	4	9	13	内斜視
15	藤 ○ 千○子	1.2	1.2				
16	宮 ○ 文 ○	1.5	1.5	7	4	11	
17	山 ○ 敦 ○	1.5	1.5	1	11	12	慢性扁桃炎
合 計				32	96	128	
未 検 診						2	

2  
組

№	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	片 ○ 弥 ○	1.5	1.5	2	1	3	ツ反応 (±)
2	菊 ○ 留 ○	1.2	1.2	3	4	7	ツ反応 (卅)
3	小 ○ 周 ○	1.2	1.2	0	14	14	ツ反応 (±)
4	塩 ○ 礼 ○	1.2	1.2	0	2	2	
5	高 ○ 良 ○	1.5	1.5	1	5	6	結膜炎
6	馬 ○ 伊○子	0.8	1.0	0	9	9	結膜炎
7	迫 ○ 成 ○	1.5	1.5	3	1	4	ツ反応 (卅)
8	久 ○ 育 ○	1.5	1.5	0	5	5	難産 (骨盤位)

9	古 ○ 勝 ○	0.8	0.8	6	6	12	ツ反応 (+)
10	丸 ○ 良 ○	1.2	1.5	1	2	3	結膜炎
11	正 ○ 公 ○	1.5	1.5	6	4	10	ツ反応 (+)
12	宮 ○ 一○三	1.2	1.5	4	8	12	
13	三 ○ とも○	1.0	1.2	2	9	11	
14	山 ○ 里 ○	1.0	1.5	0	11	11	ツ反応 (±)
15	○ 中 ○ 恵	1.2	0.8	0	11	11	
16	吉 ○ 敏 ○	1.5	1.5	0	15	15	ツ反応 (+)
17	松 ○ 弘 ○	1.5	1.5				ツ反応 (+)
合 計				28	107	135	
未 検 診		1					

3  
組

No	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	足 ○ 二 ○	1.5	1.5	2	3	5	難産
2	井 ○ 早 ○	1.5	1.5	0	6	6	
3	加 ○ 美○子	1.2	1.2	3	6	9	
4	小 ○ 純 ○	1.5	1.5	0	10	10	慢性扁桃炎
5	○ 山 嘉 ○	1.5	1.0	1	5	6	
6	紫 ○ 陽 ○	1.5	1.2	4	5	9	
7	清 ○ 弘 ○	1.5	1.5	2	12	14	
8	高 ○ 典 ○	1.0	1.0	2	4	6	慢性鼻炎
9	西 ○ 元 ○	1.5	1.5	2	2	4	
10	野 ○ 明 ○	1.5	1.5	0	10	10	
11	服 ○ 逸 ○	0.6	1.0	5	9	14	
12	林 ○ 里	1.5	1.2	6	5	11	
13	藤 ○ ゆ か	1.5	1.5	2	3	5	
14	毎 ○ 美○子	1.5	1.5	3	7	10	
15	前 ○ 祐○子	1.5	1.5	8	5	13	ツ反応 (+)
16	水 ○ ○美子	1.5	1.5	5	1	6	ツ反応 (+)
17	南 さ○き	1.5	1.2	3	9	12	
合 計				48	102	150	

## 4組

№	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	加 ○ 宏 ○	1.2	1.5	4	4	8	ツ反応 (±) ツ反応 (+) ツ反応 (±)
2	神 ○ ま○み	1.5	1.5	1	4	5	
3	田 ○ 美○子	1.5	1.5	2	6	8	
4	○ 路 利○子	1.5	1.5	5	2	7	
5	永 ○ 妙 ○	1.5	1.5	3	8	11	
6	中 ○ 加○子	1.5	1.5	0	7	7	
7	細 ○ 昌 ○	1.2	1.5	0	0	0	
8	前 ○ 裕 ○	1.0	1.2	2	6	8	
9	松 ○ 佳 ○	1.5	1.5	0	14	14	
10	○ 本 安○子	1.5	1.5	4	6	10	
11	村 ○ 佐○子	1.5	1.5	0	14	14	
12	柳 ○ 智 ○	1.5	1.5	1	8	9	
13	山 ○ 桂 ○	1.5	1.2	2	8	10	
合 計				24	87	111	

## 5組

№	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	伊 ○ 淳 ○	1.5	1.5	2	9	11	ツ反応 (+)
2	○ 藤 裕○子	1.5	1.5	0	6	6	ツ反応 (+)
3	上 ○ 泰 ○	1.5	1.5	6	7	13	結膜炎 ツ反応 (+)
4	梅 ○ 貴○子	1.2	1.5	4	0	4	結膜炎
5	岡 み○き	1.5	1.5	2	4	6	結膜炎
6	興 ○ 美	1.5	1.5	0	12	12	ツ反応 (+)
7	河 ○ 初 ○	0.3	0.3	1	7	8	ツ反応 (+)
8	北 ○ 真○子	1.2	1.2	0	6	6	ツ反応 (+)
9	田 ○ 厚 ○	1.0	1.0	3	1	4	結膜炎
10	豊 ○ 美○子	1.5	1.5	0	13	13	
11	中 ○ 由○理	1.5	1.5	4	1	5	
12	福 ○ 千○子	1.5	1.5	6	2	8	
13	八 ○ 雅 ○	2.0	1.5	8	3	11	
14	山 ○ 悦 ○	1.2	1.0	6	0	6	

15	矢 ○ 恭 ○	1.5	1.5	3	16	19	
16	小 ○ 光 ○	1.5	1.5	1	8	9	
合 計				46	95	141	

6  
組

No.	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	荒 ○ ○ 恵	1.5	1.5	8	4	12	ツ反応 (±)
2	上 ○ 和 ○	1.5	1.5	3	6	9	
3	永 ○ 和 ○	1.5	1.5	4	3	7	
4	喜 ○ 美○緒	1.0	1.0	0	5	5	
5	栗 ○ 真 ○	1.5	1.5	2	5	7	
6	小 ○ 伸 ○	0.8	1.0	0	13	13	
7	紫 ○ 篤 ○	1.2	1.2	6	1	7	
8	高 ○ 恵 ○	1.5	1.5	0	10	10	
9	田 ○ 美 ○	1.5	1.2	0	12	12	
10	中 ○ 貴 ○	1.2	1.2	6	5	11	
11	西 ○ 敦 ○	0.8	0.8	7	2	9	ツ反応 (±) 寄生虫卵 (+)
12	延 ○ 梅 ○	1.2	1.5	0	3	3	
13	則 ○ 潤 子	1.5	1.5	4	6	10	
14	葉 ○ ○ 美	1.0	1.0	2	6	8	
15	松 ○ 典 ○	0.6	0.4	1	15	16	
合 計				43	96	139	

## 7組

No.	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	秋 ○ 智 ○	1.5	1.5	2	7	9	ツ反応 (+)
2	荒 ○ 照 ○	1.5	1.5	0	3	3	
3	土 ○ 博 ○	1.5	1.5	1	6	7	
4	大 ○ 由 ○	1.2	1.2	8	3	11	
5	○ 治 敦 ○	1.5	1.5	0	0	0	
6	小 ○ 弘 ○	1.5	1.2	0	8	8	生時 4.2kg、55cm
7	白 ○ 芳 ○	1.5	1.5	1	10	11	ツ反応 (±)
8	富 ○ 千○子	1.5	1.5	0	0	0	
9	箱 ○ 美○子	1.2	1.2	5	5	10	
10	藤 ○ 良 ○	1.5	1.2	8	7	15	
11	堀 ○ ○ 美	1.5	1.5	1	12	13	
12	三 ○ 久○子	0.6	0.8	0	16	16	小児喘息 ツ反応 (+)
13	南 佳○子	1.5	1.5	2	9	11	
14	村 ○ 哉 ○	1.2	1.2	3	14	17	
15	篠 ○ 優○子	1.2	1.2	3	12	15	
16	山 ○ 和 ○	1.2	1.5	3	3	6	
17	○ 口 広 ○	1.5	1.5	0	17	17	
18	山 ○ 裕 ○	2.0	1.5	0	8	8	
合 計				37	140	177	

## 8組

No.	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	稲 ○ あ○ね	1.0	1.0	6	4	10	蟻虫卵 (+)
2	巖 佳 ○	1.2	1.2	0	18	18	
3	大 ○ 理○子	1.5	1.5	2	10	12	扁桃肥大
4	岡 ○ み○子	1.5	1.5	8	2	10	慢性鼻炎
5	奥 ○ ひ○み	1.5	1.5	2	8	10	結膜炎 ツ反応 (++)
6	川 ○ 好 ○	1.5	1.5	2	4	6	蟻虫卵 (+)
7	杉 ○ 美○子	1.0	1.5	7	9	16	ツ反応 (+)
8	高 ○ 真○子	1.2	1.2	2	3	5	扁桃肥大
9	辰 ○ 純 ○	1.2	1.2	1	12	13	

10	泊 美○子	1.0	1.2	0	12	12	結膜炎 ツ反応 (+)
11	難 ○ 祐 ○	1.5	1.5	5	6	11	慢性鼻炎
12	野 ○ 千 ○	1.5	1.5	0	16	16	慢性扁桃炎
13	藤 ○ 照 ○	1.5	1.2	4	8	12	
14	前 ○ 弘 ○	1.5	1.5	0	0	0	ツ反応 (±)
15	増 ○ 紀 ○	1.5	1.5	6	7	13	
16	山 ○ 牧 ○	1.5	1.2	4	0	4	蟻虫卵 (+) ツ反応 (±)
17	○ 本 由○子	1.2	1.2	3	8	11	
合 計				52	127	179	

9  
組

No	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	井 ○ 阿○子	1.5	1.5	6	4	10	
2	伊 ○ ひ○子	1.5	1.5	7	5	12	
3	木 ○ 明 ○	1.5	1.5	2	9	11	蟻虫卵 (+)
4	桑 ○ 智○子	1.5	1.0	8	12	20	慢性扁桃炎
5	小 ○ や○え	1.5	1.5	4	2	6	ツ反応 (卅)
6	竹 ○ 秀 ○	1.5	1.5	8	4	12	ツ反応 (+)
7	田 ○ 邦 ○	1.5	1.5	1	4	5	ツ反応 (±)
8	谷 ○ 豊 ○	2.0	1.5	0	12	12	肺動脈音雑音 ツ反応(卅)
9	中 ○ 満 ○	1.5	1.5	1	9	10	
10	福 ○ 幸 ○	1.0	1.0	1	11	12	
11	古 ○ 則 ○	1.5	1.2	0	12	12	
12	増 ○ 芳 ○	1.5	1.5	1	14	15	
13	三 ○ 睦 ○	1.5	1.5	2	12	14	
14	美 ○ 尚 ○	1.2	1.2	0	15	15	
15	村 ○ 京 ○	1.5	1.5	4	6	10	
16	堀 ○ ○ 香	2.0	1.5	0	5	5	
17	山 ○ 晴 ○	2.0	1.5	7	6	13	
18	○ 津 成 ○	1.5	1.5	2	1	3	
19	吉 ○ 圭 ○	1.5	1.5	2	5	7	
20	○ 村 早 ○	1.5	1.5	0	4	4	
合 計				56	152	208	

10  
組

No.	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	大 ○ 昌 ○	1.5	1.5	6	5	11	結膜炎
2	尾 ○ め○み	1.5	1.5	7	0	7	ツ反応 (+)
3	小 ○ 智 ○	1.5	1.5	0	13	13	
4	城 泰 ○	0.5	1.5	8	8	16	
5	須 ○ ○ 恵	1.5	1.5	2	12	14	ツ反応 (+)
6	竹 ○ ○ 笑	1.2	1.2	2	2	4	
7	丁 ○ 雅 ○	1.5	1.5	1	13	14	
8	浜 ○ ひ○み	1.5	1.5	1	0	1	慢性鼻炎
9	藤 ○ 幸 ○	1.5	1.5	0	12	12	結膜炎 ツ反応 (±)
10	水 ○ 桂 ○	1.5	1.5	0	0	0	結膜炎
11	山 ○ 久○子	1.5	1.5	1	0	1	
12	○ 田 智 ○	1.2	1.5	0	4	4	
13	山 ○ 里 ○	1.5	1.5	2	5	7	慢性鼻炎 ツ反応 (++)
14	吉 ○ 典 ○	1.5	1.5	2	13	15	
合 計				32	87	119	

11  
組

No.	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	明 ○ し○ぶ			5	9	14	
2	亀○園 洋 ○			0	10	10	ツ反応 (+)
3	工 ○ 美○子			3	12	15	
4	沢 ○ 佳○子			0	11	11	中耳炎
5	杉 ○ 真○恵			4	4	8	慢性鼻炎 ツ反応 (+)
6	関 美○子			5	2	7	結膜炎、扁桃肥大
7	高 ○ 智 ○			8	0	8	慢性鼻炎
8	武 ○ 加 ○			0	7	7	
9	田 ○ 典 ○			0	0	0	
10	中 ○ 英 ○			0	11	11	
11	○ 島 鏡 ○			1	2	3	難聴
12	西 ○ 直 ○			0	1	1	慢性鼻炎
13	野 ○ 明 ○			1	11	12	



14	畠 ○ ○ 衛			0	0	0	
15	平 ○ 正 ○			0	8	8	
16	樋 ○ 万○子			0	10	10	
17	藤 ○ 康 ○			0	10	10	慢性鼻炎
18	八 ○ 恵 ○			4	6	10	
19	山 ○ 信 ○			0	10	10	慢性鼻炎
20	雪 ○ 一 ○			0	16	16	
合 計				31	140	171	
未 検 診							

12  
組

№	氏 名	視 力		う 歯			備 考
		右	左	処 置	未処置	計	
1	飯 ○ 千○子	1.2	1.5	0	15	15	
2	土 ○ 玲 ○	1.0	1.0	0	11	11	結膜炎
3	小 ○ 秀 ○	1.5	1.5	2	1	3	ツ反応 (±)
4	樺 ○ 和 ○	1.5	1.5	3	0	3	ツ反応 (±)
5	川 ○ 佳 ○	2.0	1.5	1	7	8	慢性鼻炎
6	熊 ○ 裕 ○	1.5	1.5	1	10	11	
7	黒 ○ 淳 ○	1.5	1.5	6	2	8	
8	○ 谷 裕 ○	1.5	1.5	1	6	7	
9	後 ○ 俊 ○	1.5	1.5	0	18	18	
10	○ 林 美○子	1.0	1.0	0	0	0	結膜炎
11	高 ○ 晃 ○	1.0	1.2	0	7	7	
12	○ 橋 ○ 香	0.3	0.3	1	3	4	
13	田 ○ 志○子	1.5	1.2	4	9	13	
14	津 ○ 敬 ○	1.2	1.2	8	2	10	ツ反応 (±)
15	星 ○ 孝 ○	1.2	1.2	5	11	16	
16	三 ○ 美○子	1.5	1.2	2	10	12	ツ反応 (±)
17	吉 ○ 智 ○	2.0	1.5	0	13	13	結膜炎
18	○ 村 早 ○	1.0	1.2	4	0	4	扁桃肥大
19	篠 ○ 広 ○	1.5	1.5	5	2	7	
合 計				43	127	170	

### III 調査成績

#### (1) う 歯

う歯は発生しやすい素因があるところへ外部から直接う蝕をおこす原因が働いて生じる。う歯発生の本態として、化学細菌説が一般に信じられている。かつ都市の小学校は農村の小学校よりも、う歯罹患率は高いと統計はしめしている。<sup>(2)</sup>

わが国の戦前における1—2才児のう歯発生率はせいぜい5%内外であったが、最近の発表は3才児にすでに80%の者が要処置者であり、残りの20%も要注意者であるといわれ、かつ1人平均5本が罹患していると中村氏等<sup>(3)</sup>は述べている。また宮田氏<sup>(4)</sup>は3才児のう歯保育率は80.5%で1人当たり5.6本がみられ、男女ともに月令3ヵ月ごとに約10%ずつう蝕が増すという如く極めて加速現象を示すと報告している。

歯科の分野においてほぼ乳歯列が完成する年齢は3歳であり、これは乳歯に対してう歯の初感染が一応終る年齢でもあるという。この年齢の子供達のもとう歯の数は、そのご5才児、6才児と比較して殆んど異ならないと深田氏等<sup>(5)</sup>は述べている。なお昭和32年歯科疾患実態調査報告は5才児の乳歯1人平均う歯数は男児8.57本、女児8.86本と記している。

今回の5才児406名についての乳歯のう蝕の実態は次の如くである。

第1表 男児（5才児）う歯数の実態

うし数 性別	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	18	19	20	合計	未 検診
1	1	0	0	1	1	0	1	2	1	0	1	2	2	2	0	1	0	0	0	0	15	1
2	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	4	2	1	0	1	2	1	0	0	1	15	
3	0	0	1	1	0	2	2	1	2	0	3	0	3	0	1	1	0	2	0	0	19	
4	0	1	0	0	0	0	1	2	3	4	0	1	1	0	2	1	0	0	0	0	16	
5	1	0	0	1	1	0	0	1	2	3	3	0	0	1	0	1	0	2	0	0	16	
6	0	0	0	0	4	2	1	1	1	0	4	0	1	0	1	1	1	1	0	1	19	
7	0	0	0	0	1	1	1	2	1	2	3	0	1	0	3	0	0	0	1	0	16	
8	1	0	0	2	2	0	1	2	0	2	0	2	2	1	0	0	2	0	1	0	18	1
9	1	0	0	3	1	0	2	0	1	2	1	2	1	2	1	1	0	0	1	0	19	
10	4	1	2	1	1	0	3	0	0	1	2	0	2	1	0	0	1	0	0	0	19	
11	1	0	0	1	1	0	5	0	3	0	0	2	0	1	0	0	0	1	0	0	15	
12	2	1	0	1	0	1	1	0	2	0	2	2	0	0	1	0	1	0	0	0	14	
合計	12	3	3	12	12	7	18	11	16	14	23	13	14	8	10	8	6	6	3	2	201	2
うし 合計	0	3	6	36	48	35	108	77	128	126	230	143	168	104	140	120	96	108	57	40	1773	

第2表 女児（5才児）う歯数の実態

うし数 性別	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	合計	未 検診
1	0	0	1	2	2	1	1	0	0	0	1	1	2	2	1	0	1	0	0	0	0	15	2
2	0	0	1	2	1	1	1	1	0	1	1	3	2	0	1	1	0	0	0	0	0	16	1
3	0	0	0	0	1	2	4	0	0	2	3	1	1	1	2	0	0	0	0	0	0	17	
4	1	0	0	0	0	1	0	2	3	1	2	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	13	
5	0	0	0	0	2	1	4	0	2	1	0	2	1	2	0	0	0	0	0	1	0	16	
6	0	0	0	1	0	1	0	3	1	2	2	1	2	1	0	0	1	0	0	0	0	15	
7	2	0	0	1	0	0	1	1	2	1	1	3	0	1	0	2	1	2	0	0	0	18	
8	1	0	0	0	1	1	1	0	0	0	3	2	3	2	0	0	2	0	1	0	0	17	
9	0	0	0	1	0	3	1	1	0	0	3	1	5	1	1	2	0	0	0	0	1	20	
10	1	2	0	0	2	0	0	2	0	0	0	1	1	1	2	1	1	0	0	0	0	14	
11	2	1	1	0	0	0	0	2	3	0	5	2	1	0	1	1	1	0	0	0	0	20	
12	1	0	0	2	2	0	0	3	2	0	1	2	1	2	0	1	1	0	1	0	0	19	
人 合計	8	3	3	9	11	11	13	15	13	8	22	20	19	13	10	8	8	2	2	1	1	200	3
うし 合計	0	3	6	27	44	55	78	105	105	72	220	220	228	169	140	120	128	34	36	19	20	1829	

# イ) 男 児

男児203名中、未検診者2名をのぞく201名について観察すると、う歯皆無者は12名（5.97%≒6%）にすぎない。のこりの189名（94%）はう歯所有者であり、この値は「昭和42年度兵庫県児童生徒被患率比較」の84.4%（全国平均87.0%）に比して高率であり、1人平均8.82本をもつことになる。分布状態の高いのは10本の23名が最も多く、ついで6本の18名、8本の16名、9本と12本の各々14名、11本の13各等々の順である。う歯の最も少ないのは1本の3名、最も多いのは20本の2名である。なおう歯合計1773本中、処置と未処置の状態は次の如くである。

第3表 男児のう歯に関する処置、未処置の実態

組 別	う 歯			未 検 診
	処 置 数	未処置数	合 計	
1	27	105	132	1
2	31	131	162	
3	37	144	181	
4	45	102	147	
5	24	127	151	
6	41	141	182	
7	38	120	158	
8	28	134	162	
9	32	137	169	1
10	24	88	112	
11	4	110	114	
12	25	78	103	
合 計	356	1,417	1,773	2名
%	20.1	79.9	100	

処置数356本（20.1％）、未処置数1417本（79.9％）であり、育児者の歯芽に対する保健知識の低いことがうかがわれる。

# ロ）女 児

女兒203名中、未検診者3名をのぞく200名について観察すると、う歯皆無者は8名で4％であり、男児より罹患率が高い。う歯所有者は192名で96％を占める。この値は兵庫県の84.2％（全国平均86.9％）に比して11.8％も上回る値をしめした。なお1人平均9.14本となる。分布状態の高いのは、10本の22名が最も多く、ついで11本の20名、12本の19名、7本の15名、8本と13本の各々13名等々の順である。う歯数の最も少ないのは1本の3名、最も多いのは20本の1名である。

う歯合計1,829本中、処置と未処置の状態は次の如くである。

第4表 女兒のう歯に関する処置、未処置の実態

組 別	う 歯		合 計	未 検 診
	処 置 数	未処置数		
1	32	96	128	2
2	28	107	135	1
3	48	102	150	
4	24	87	111	
5	46	95	141	
6	43	96	139	
7	37	140	177	
8	52	127	179	
9	56	152	208	
10	32	87	119	
11	31	140	171	
12	43	127	170	
合 計	472	1,356	1,828	3名
%	25.8	74.2	100	

処置数472本 (25.8%)、未処置数1,356本 (74.2%) であり、女兒の処置状態は男児より良好である。

以上の成績から育児者は今後歯の衛生にもっと関心をしめし、乳歯の基礎の上にたつ永久歯の発生とその保健に深慮をはらうべきである。

乳幼児は少なくとも歯が痛くならなければ、訴えることをしないから、少くとも年2回は歯の検診を受ける必要があるし、早期発見、早期治療の実行は5才児以前からなすべきである。これにより歯蝕の抑制効果はあがり、う歯罹患率は現在より低下しうと信ずる次第である。

## (2) 視 力

学校衛生における視力で一番問題になるのは近視であるが、わが国においては、大正の後半から昭和の初めにかけて、比較的急激に増加し、殊に学生に多かったが、戦前から戦後にかけて衛生思想の普及により一時著しく減少した。しかし最近再び増加の兆が見えると眼科の教科書はのべている。

就学前の幼児の視力の実態は次の如くである。

第5表男児 203名 (5才児) 視力の実態

組別	右 眼 視 力										人員 合計	左 眼 視 力									
	2.0	1.5	1.2	1.0	0.8	0.6	0.4	0.3	0.2	未 検 診		2.0	1.5	1.2	1.0	0.8	0.6	0.4	0.3	0.2	未 検 診
1	1	12	2	0	0	0	0	0	0	0	15	0	12	3	0	0	0	0	0	0	0
2	0	10	2	2	1	0	0	0	0	0	15	0	11	3	0	1	0	0	0	0	0
3	2	13	3	0	1	0	0	0	0	0	19	2	13	3	0	1	0	0	0	0	0
4	0	14	2	0	0	0	0	0	0	0	16	0	14	2	0	0	0	0	0	0	0
5	0	14	1	0	0	1	0	1	0	0	17	0	11	4	1	1	0	0	0	0	0
6	0	12	5	2	0	0	0	0	0	0	19	0	15	4	0	0	0	0	0	0	0
7	0	12	3	0	0	1	0	0	0	0	16	0	11	4	0	0	0	0	1	0	0
8	1	12	4	1	0	0	0	0	0	0	18	0	12	6	0	0	0	0	0	0	0
9	0	14	2	2	0	1	1	0	0	0	20	0	15	1	1	0	1	1	0	1	0
10	1	14	2	2	0	0	0	0	0	0	19	1	14	2	2	0	0	0	0	0	0
11										15	15										15

12	0	13	1	0	0	0	0	0	0	14	0	13	1	0	0	0	0	0	0
人員 合計	5	140	27	9	2	3	1	1	15	203	3	141	33	4	3	1	1	1	15
%	2.4	69.0	13.3	4.4	1.0	1.5	0.5	0.5	7.4	100	1.5	69.4	16.2	2.0	1.5	0.5	0.5	0.5	7.4

第6表 女児 203名（5才児）視力の実態

組別	右眼視力								未 検診	人員 合計	左眼視力								未 検診
	2.0	1.5	1.2	1.0	0.8	0.6	0.5	0.3			2.0	1.5	1.2	1.0	0.8	0.4	0.3		
1	3	9	1	2	0	2	0	0	0	17	2	6	7	1	1	0	0	0	
2	0	7	6	2	2	0	0	0	0	17	0	10	4	1	2	0	0	0	
3	0	14	1	1	0	1	0	0	0	17	0	10	4	3	0	0	0	0	
4	0	10	2	1	0	0	0	0	0	13	0	11	2	0	0	0	0	0	
5	1	10	3	1	0	0	0	1	0	16	0	12	1	2	0	0	1	0	
6	0	7	3	2	2	1	0	0	0	15	0	7	3	3	1	1	0	0	
7	1	11	5	0	0	1	0	0	0	18	0	11	6	0	1	0	0	0	
8	0	10	4	3	0	0	0	0	0	17	0	9	7	1	0	0	0	0	
9	3	15	1	1	0	0	0	0	0	20	0	16	2	2	0	0	0	0	
10	0	11	2	0	0	0	1	0	0	14	0	13	1	0	0	0	0	0	
11										20								20	
12	2	9	3	4	0	0	0	1	0	19	0	10	6	2	0	0	1	0	
人員合計	10	113	31	17	4	5	1	2	20	203	2	115	43	15	5	1	2	20	
%	4.9	55.7	15.3	8.4	2.0	2.4	0.5	1.0	9.8	100	1.0	56.7	21.2	7.4	2.4	0.5	1.0	9.8	

#### イ) 男 児

203名の右眼の視力状態をみると、最高視力は2.0の5名、最低視力は0.07の1名である。最も分布率の高いのは1.5の140名（69.0%）、ついで1.2の27名、1.0の9名等の順をしめし、視力正常者は181名（89.2%）と推定される。つぎに近視眼と推定される者は視力0.8の2名、0.6の3名、0.4と0.07の各々1名の合計7名である。なお11組の全員15名（7.4%）は専門医の急病のため未検診となったことは残念であった。

左眼の状態をみると、最高視力は2.0の3名、最低視力は0.07の1名であり、最も分布率の高いのは1.5の141名（69.4%）、ついで1.2の33名、1.0の4名等となり、視力正常者は合計181名と推定される。つぎに0.8の3名、0.6の1名、0.4の1名、0.2の1名、0.07の1名の計7名（3.4%）は近視眼と推定される。

さらに両眼同視力、異視力の実態をみると次の如くである。

第7表 男児両眼の同視力、異視力の実態

組 別	両 眼 同 視 力							異 視 力	未 検 診	合 計
	2.0	1.5	1.2	1.0	0.8	0.6	0.4			
1	0	11	1	0	0	0	0	3	0	15
2	0	10	1	0	0	0	0	4	0	15
3	2	13	3	0	1	0	0	0	0	19
4	0	12	0	0	0	0	0	4	0	16
5	0	11	1	0	0	0	0	5	0	17
6	0	12	3	0	0	0	0	4	0	19
7	0	10	1	0	0	0	0	5	0	16
8	0	11	4	0	0	0	0	3	0	18
9	0	13	0	1	0	1	1	4	0	20
10	1	13	0	1	0	0	0	4	0	19
11									15	15
12	0	12	0	0	0	0	0	2	0	14
合計	3	128	14	2	1	1	1	38	15	203
%	1.5	63.0	6.9	1.0	0.5	0.5	0.5	18.7	7.4	100

両眼視力の同じ者は2.0の3名（1.5％）、1.5の128名（63.0％）、1.2の14名（6.9％）、1.0の2名（1.0％）、0.8の1名（0.5％）、0.6の1名（0.5％）、0.4の1名（0.5％）で合計150名（73.9％）である。左右の異なる者は38名（18.7％）、未検診15名（7.4％）である。

受検者188名を対照してみると両眼の同視力者は79.8%即ち約80%は等しいとみなされる。次に左右の何れかが視力1.0以下の者の両眼の状態は次の如く10名である。



№	組別	右 眼	左 眼	備 考
1	2	0.8	1.2	慢性扁桃炎
2	2	1.2	0.8	
3	3	0.8	0.8	内斜視
4	5	0.6	0.8	結膜炎
5	5	0.07	1.2	
6	7	0.6	1.2	
7	7	1.2	0.2	
8	9	0.6	0.6	
9	9	0.4	0.4	難産
10	9	1.5	0.07	扁桃炎

このうち両眼共に視力1.0以下の者は4名（2.0％）にすぎない。なお5組に両眼視力ともに1.5であるが色弱を発見された者が1名みられる。

#### ロ）女 児

203名の右眼の視力状態をみると、最高視力は2.0の10名（4.9％）、最低視力は0.3の2名（1.0％）である。分布率の最も高いのは1.5の113名（55.7％）ついで1.2の31名（15.3％）、1.0の17名（8.4％）、2.0の10名、0.6の5名（2.4％）、0.8の4名（2.0％）、0.3の2名、0.5の1名（0.5％）の順であり、なお男児と同様に11組の20名（9.8％）は未検診者である。以上から視力正常者は171名（84.2％）、近視を推定しうる者は12名（5.9％）となる。

左眼の状態をみると最高視力は2.0、最低は0.3であり、分布率の高いのは1.5の115名（56.7％）である。ついで1.2の43名（21.2％）、1.0の15名（7.4％）、0.8の5名（2.4％）、2.0と0.3の各々2名（各々1.0％）、0.4の1名（0.5％）の順をしめす。

以上から視力正常者は175名（86.2％）、近視推定者は8名（4.0％）である。さらに両眼の同視力、異視力の状態は次の如くである。

第8表 女児両眼の同視力、異視力の実態

組 別	両 眼 同 視 力						異 視 力	未 検 診	合 計
	2.0	1.5	1.2	1.0	0.8	0.3			
1	2	5	1	1	0	0	8	0	17
2	0	7	3	0	1	0	6	0	17
3	0	10	1	1	0	0	5	0	17
4	0	9	0	0	0	0	4	0	13
5	0	10	1	1	0	1	3	0	16
6	0	6	2	2	1	0	4	0	15
7	0	9	4	0	0	0	5	0	18
8	0	8	4	0	0	0	5	0	17
9	0	13	1	1	0	0	5	0	20
10	0	11	1	0	0	0	2	0	14
11								20	20
12	0	7	2	2	0	1	7	0	19
合計	2	95	20	8	2	2	54	20	203
%	1.0	46.8	4.0	4.0	1.0	1.0	26.6	9.8	100

両眼視力の同じ者は2.0の2名（1.0％）、1.5の95名（46.8％）、1.2の20名（9.8％）、1.0の8名（4.0％）、0.8の2名（1.0％）、0.3の2名（1.0％）の合計129名（63.6％）である。左右の異なる者は54名（26.6％）であり、未検診者20名を除いた183名を対照に考えると両眼視の等しい者は70.5％とみなされる。

次に左右何れかが視力1.0以下の者の両眼状態は次の如く13名である。

№	組別	右 眼	左 眼	備 考
1	1	0.6	1.2	内斜視 結膜炎
2	1	0.6	1.2	
3	2	0.8	1.0	
4	2	0.8	0.8	
5	2	1.2	0.8	
6	3	0.6	1.0	
7	5	0.3	0.3	
8	6	0.8	1.0	
9	6	0.8	0.8	
10	6	0.6	0.4	
11	7	0.6	0.8	
12	10	0.5	1.5	
13	12	0.3	0.3	

このうち両眼共に視力1.0以下の者は6名（3.0％）である。

以上の実態から406名を総括すると右眼視力1.0以上は男児181名、女児171名で計352名（86.7％）、1.0以下の視力者は男児7名、女児12名で計19名（4.7％）、未検診は左右眼共に男児15名、女児20名（8.6％）である。

左眼視力1.0以上は男児181名、女児175名で計356名（87.7％）、1.0以下の者は男児7名、女児8名で計15名（3.7％）である。なお両眼同視力者は男児150名、女児129名で計279名（68.7％）、異視力者は男児38名、女児54名で計92名（22.7％）である。かつ両眼共に視力1.0以下の者は男児4名、女児6名で計10名（2.5％）である。

神戸市立楠幼稚園の成績は以上の如く就学前には視力の劣る者は非常に少ないことが認められた。我が国では学年の進むにつれて近視眼の急速増加の傾向は、一部は遺伝的關係も認められるが、多くの原因は文化生活による体質の変化とか、作業ことに近業にあるといわれる。故に幼児期から近視眼に対しては

先づ身体を強健にして眼の過労を防ぎ、姿勢を正しく、適当な彩光に注意し、印刷物等を選択し、また視力検査を度々受ける等の予防法<sup>(6)</sup>に努めるべきであり、視力1.0以下の者に対しては専門家に相談して適当な処置をなすべきである。

### (3) ツベルクリン反応

結核予防施行規則にしたがえば、6カ月までの乳児にツ反応を行ない、陰性の場合にはBCG接種をなし、30歳に至るまでのあいだは毎年これらのことを繰返すことが規定されている。わが国では1,942、3年頃から全国に並及されるようになったが、BCG接種状況の全国平均は要接種者の34%<sup>(7)</sup>にすぎず極めて低率であることは遺憾である。

萱場氏等<sup>(8)</sup>は3才児255名にツ反応を施行した結果は陽性者34.9%、疑陽性者14.7%、陰性者50.4%であったと述べている。

5才児の場合、幼稚園入園時の4月の状態は次表の如くである。

第9表 男児203名のツ反応の実態

組 別	ツベルクリン反応			合 計
	(+)	(±)	(-)	
1	0	1	14	15
2	1	2	12	15
3	3	2	14	19
4	3	0	13	16
5	0	1	16	17
6	1	1	17	19
7	1	0	15	16
8	4	0	14	18
9	3	4	13	20
10	4	1	14	19
11	2	0	13	15
12	1	0	13	14
合 計	23	12	168	203
%	11.3	5.9	82.8	100

第10表 女児203名のツ反応の実態

組 別	ツベルクリン反応			合 計
	(+)	(±)	(-)	
1	0	0	17	17
2	7	3	7	17
3	2	0	15	17
4	1	2	10	13
5	6	0	10	16
6	0	2	13	15
7	2	1	15	18
8	3	2	15	17
9	3	1	16	20
10	3	1	10	14
11	2	0	18	20
12	0	4	15	19
合 計	29	16	158	203
%	14.3	7.9	77.8	100

以上を総括すると次の如くなる。

性 別	ツベルクリン反応			合 計
	(+)	(±)	(-)	
男 児	23	12	168	203
女 児	29	16	158	203
合 計	52	28	326	406
%	12.8	6.9	80.3	100

男児203名中ツ反応(+)を示した者は23名(11.3%)、ツ反応(±)は12名(5.9%)、ツ反応(-)は168名(82.8%)である。女兒の場合はツ反応(+)は29名(14.3%)、ツ反応(±)は16名(7.9%)、ツ反応(-)は158名(77.8%)である。即ち楠幼稚園の5才児の場合には406名中ツ反応陽性者は52名でこれは全体の12.8%をしめし、疑陽性者は28名で6.9%、陰性者は326名で80.3%である。この数字は5大都市の一つとして人口密度の高い神戸市内の幼稚園としては陰性者の率は予想以上に高いことを発見した。なおBCG接種による免疫の持続時間は勿論個人差がみられるので、入園時にツ反応陽性の者の中にも10月の再検査の時には陰性になった者もあり、また5月にBCGを接種したのになお免疫を生じていない者もみられた。したがって結核予防施行規則は正しく守るべきであるとその必要性を痛感した次第である。

#### Ⅳ ま と め

就学前の5才児406名(男児203名、女兒203名)についての保健状態、特に乳歯の齲蝕状態、視力、ツベルクリン反応の実態は次の如くである。

##### (1) う 歯

##### イ) 男 児

未検診2名を除く201名中、う歯皆無者は12名(約6%)、のこり94%はう歯所有者である。分布率の高いのは10本の23名、ついで6本の18名、8本の16名、

9本と12本の各々14各等々の順がみられ、最も多く持つ者は20本の2名がみられた。1人平均8.8本をしめした。なお、う歯中処置20.1%、未処置は79.9%におよび、育児者の反省を促がしたい。

#### ロ) 女 児

未検診3名を除く200名中、う歯皆無者は8名(4%)、のこり96%はう歯所有者である。分布率の高いのは10本の23名、ついで11本の20名、12本の9名、7本の15名、8本と13本の各々13各等々の順がみられ、最も多く持つ者は20本の1名であり、1人平均9.1本をしめした。う歯総数中、処置(25.8%)、未処置74.2%で男児よりやゝ処置状態は良好である。

### (2) 視 力

#### イ) 男 児

右眼最高視力は2.0の5名、最低は0.07の1名であり、最も分布率の高いのは1.5の140名(69%)、ついで1.2の27名、1.0の9名等々の順であり、視力正常者は181名(89.2%)視力1.0以下の者は7名である。

左眼の最高視力は2.0の3名、最低は0.07の1名、最も分布率の高いのは1.5の141名(69.4%)、ついで1.2の33名、1.0の4名等の順であり、視力正常者は181名、1.0以下の者は7名である。

なお両眼視力の等しい者は150名(73.9%)、異なる者は38名(18.7%)未検査15名(7.4%)である。

次に左右の何れかの視力が1.0以下を示す者は10名、中両眼共に1.0以下は4名(2.0%)にすぎない。なお両眼視力ともに1.5であるが色弱をしめす者が1名発見された。

#### ロ) 女 児

右眼最高視力は2.0の10名、最低は0.3の2名、分布率の高いのは1.5の113名(55.7%)、1.2の31名(15.3%)、1.0の17名(8.4%)、等々の順であり、視力正常者は171名(84.2%)、視力1.0以下は12名(5.9%)である。

左眼最高視力は2.0(2名)、最低0.3(2名)、分布状態は1.5の115名(56.7

%)、1.2の43名 (21.2%)、1.0の15名 (7.4%) 等々の順であり、視力正常者 175名 (86.2%)、1.0以下は8名 (4.0%) である。

なお両眼視力の等しい者は129名 (63.6%)、異なる者は54名 (26.6%)、未検診20名 (9.8%) である。次に左右何れかが1.0以下を示す者は13名みられ、このうち両眼共に1.0以下は6名 (3.0%) である。

### (3) ツベルクリン反応

4月のツ反応の結果は、男児の(+)は23名 (11.3%)、(±)は12名 (5.9%)、(-)は168名 (82.8%) であり、女児の(+)は29名 (14.3%)、(±)は16名 (7.9%)、(-)は158名 (77.8%) であった。

10月の検査時には(+)の者からも(-)となり、又5月のBCG接種後なお(-)の者もあり、BCG免疫の個人差がうかがわれた。

## 文 献

- |               |                             |      |
|---------------|-----------------------------|------|
| 1) 市 川 民慈子    | 神戸女学院大学論集 第14巻 第3号 頁1       | 1968 |
| 2) 岡西順二郎・松井熙夫 | 「保健指導の実際」 頁364 南山堂          | 1955 |
| 3) 中 村 俊 明 他  | 小児保健研究 Vol. 21, No. 3, 頁126 | 1963 |
| 4) 宮 田 英 子    | 小児保健研究 Vol. 23, No. 6, 頁266 | 1966 |
| 5) 深 田 英 朗    | 小児保健研究 Vol. 22, No. 5, 頁219 | 1964 |
| 6) 石原忍・萩原朗    | 小眼科学 頁45 金原出版               | 1958 |
| 7) 野辺地 慶 三    | 公衆衛生概説 頁143 光生館             | 1965 |
| 8) 萱 場 治 他    | 小児保健研究 Vol. 22, No. 3, 頁142 | 1964 |

Ichikawa, Tamiji

## The Hygenic Condition of Five-Year-Old Children

— Actual Condition on Decayed Teeth,  
Visual Power and Tuberculin Reaction Test —

### Résumé

A report has been given about the gripping power of pre-school children in "The Physical Condition of Infants" in *The Kobe College Studies* VOL. XIV, NO. III. At the same time I also investigated their development and hygenic condition and what was so surprising was their decayed milk teeth. To obtain strong permanent teeth, I consider that this is an important item in school hygiene. Therefore I should like to call the attention of this and a reflection on it to all those who have a part in the nurture of these children.

Subsequently amblyopia which becomes myopia is increasing among pupils and students every year as it occurs before and after their beginning school age; for this reason, it is likewise important to grasp the actual condition.

In this report there also follows a statement showing the significance of the actual condition of tuberculin reaction test given for the prevention of tuberculosis.

The results of these findings present some interesting points of view.